

☆☆文庫あれこれ☆☆

◆山焼きを数十年ぶりに見ました。晴天、無風のよい条件で、こんなに離れている我が家の2階から眺めていたのに、燃える火の熱さでみんなほっぺが赤くなるほどでした。火影が残る黒い山稜を2頭の鹿が駆け登っていったのが印象的でした。◆暮れからお正月にかけてたくさん本の寄贈がありました。下さった方々、ありがとうございます。次号にお名前を掲載させていただきます。◆そのなかに『ドリトル先生』ものが12巻ありました。今では手に入らない昔の版でまだきれいです。◆くださる本には思い出がつまっているものも多いと思います。大切に活用させていただきます。◆コーヒーを飲みながらゆったり読書のひととき、いいですね。◆ほんのたまにですが、コーヒーの染みがついたり、折れ曲がったりした本が戻ってることがあります。みんなで気持ちよく楽しめるよう、みなさん、お気をつけくださいますよう。◆中学でのおはなしの前に短い詩を読みます。まどみちお、阪田寛夫、工藤直子、八木重吉、谷川俊太郎さんなど。◆先日、谷川さんの自作朗読会に行ってきました。ピアノを弾く息子さんとのコラボもトーク(まるで漫才)もとても楽しかったです。特にことば遊びとリズムがご本人ならでは、でした。(西村)◆と、左記のような文章を書いてしまう昨今ですが、よく若い人たちの文章作成力が衰えたと耳にします。『声に出して読みたい日本語』(斎藤孝 草思社)ではありませんが、簡潔で美しく、わかりやすい文章、書いたものでも読んだ人の心に届く言葉とリズムは、自分で読むだけでなく、読み聞かせでも、おはなし(ストーリーテリング)でも、たくさん聴いて耳から入ったものが、知らず知らずのうちに血となり肉となるのではないのでしょうか。そんな思いでおはなし会を続けて行きたいと思います。◆そして、おかあさん、おとうさん、おばあちゃん、おじいちゃん、自分でどんだん字が読める人たちにも読んであげてあなたも楽しんでください。このよろこびは別物です。この文庫にはそんな本がたくさんあります。(西村)

♥♥イベントのお知らせ♥♥

「春休み・お花見頃のおはなし会」

《大きい人向け》

3月31日(土) 午後3:00~5:00

小学校以上大人まで

おはなしを聴ける人なら小さい人でもどうぞ!

《小さい人向け》

4月1日(日) 午前10:00~11:00

幼稚園、保育園、小学校1、2年まで

おひざに抱っこのお友だちもどうぞ!

(通常の文庫の日ではありませんのでご注意ください!)

♥♥語り手は、人生の大先輩であり、子どもと本をつなぐ文庫を長く続け、楽しい語りをしてくださるベテラン(富本京子、平塚みよ、古市静子、増山正子さん他)をお呼びしています。♥♥

どんなお話が飛び出すか聴いてのお楽しみ!

大人も子どももたくさんおはなし聴いて

心を羽ばたかせましょう。

☆☆今後の開館スケジュール☆☆

◆文庫の時間は土曜日は午後2時~5時

日曜日は午前10時~午後3時

◆3月は第3土日の17、18日です。

(3月31日、4月1日のおはなし会の日は、基本的に本の貸借はしません。)

◆attention please!

4月は第4土日(21、22日)です。

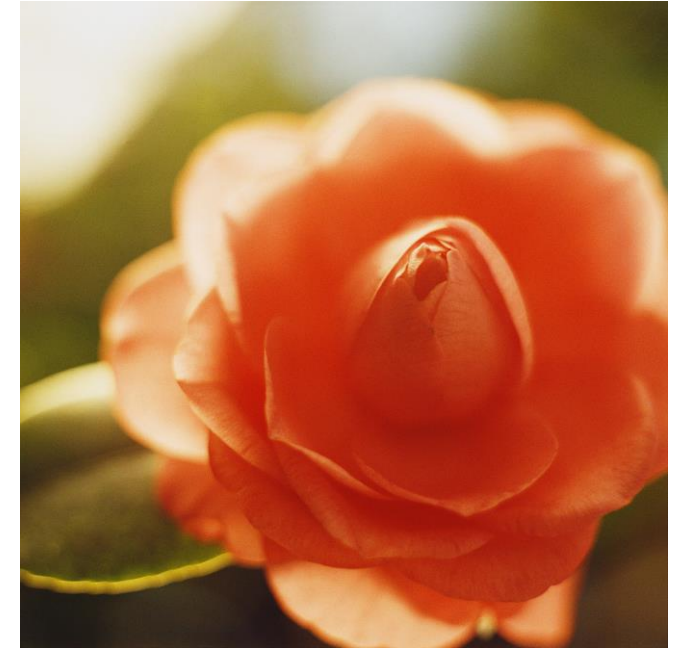
◆毎月開館日の日曜には、子どものための小さなおはなし会があります。

午前10:00~10:30です。

沙羅の樹文庫だより

No.6

(2007年2月号)



2月とは思えない暖かな日が続いていますね。

今年は、雪を見ずして春一番のすごい風

このまま春に突入?!

この頃の季節の変容も気に懸かりますが、

ともあれ、大室山の山焼きも終わり

庭の河津桜の紅い蕾も膨らんで

もうそこに緑の芽吹く季節がきています。

紹介・子どもの本 大人の本

★会員から会員へおすすめの1冊★

(文庫の棚の本を紹介していただいております)

『北岸通りの骨董屋 (メニム一家の物語)』

(シルヴィア・ウォー作 こだまともこ訳 佐竹美保絵 講談社刊 1997)

あなたは、もし人形が生きていたと知ったらどうおもいますか？そんなこと、考えただけでもドキドキしますよね？

この本『メニム一家の物語』の主人公は、世にもめずらしい人形の家族です。人形を作ったケイト・ベンシヨウという人が病院で息をひきとった後、メニムたちは、とつぜん命を授かりました。

私が紹介するのは、全5巻中第4巻の『北岸通りの骨董屋』です。

メニム家の人々はつい最近まで自分たちがなぜ命を授かったのか不思議に思ったことはありませんでした。しかし、永遠に続くと思っていた生活には限りがあるらしいということがだんだん分かってきます。そんな時、一家のおじいちゃん・マグナス卿が長男スービーにあることを打ち明けます。メニム一家に終わりのときがくると告げる声がする、というのです。

メニム一家はどうなってしまうのでしょうか。読んでいくうちに引き込まれていく、とてもおもしろいお話です。ぜひ読んでみてください。(重田 知洸)

✿知洸ちゃんは小学5年生の読書家です。さすが、読者をいざなうツボをしっかりと心得ていますね。知洸ちゃん、ありがとう！これからは、小さなお仲間にもどしどし書いてもらおうと思います。✿

『ジュリー—不思議な力をもつ少女』

(コーラ・テイラー作 さくまゆみこ訳 佐竹美保絵 小学館刊 2003)

これは、生まれながらに普通の人が見えないものを見、感じることができる女の子の話です。人はこれを透視とか予知能力があると言うのでしょうか。自分のそんな力に怯えてみんなのなかでそんな自分をどう調和させたらいいのか戸惑う女の子を描いています。

ジュリーは7人兄弟の末っ子の父さんの7人兄妹の末っ子(ここが重要なところ)。大柄で亜麻色の髪のにいさんねえさんと違って小柄でこい髪の色をしていて、小さいときから色々なことに気がつき何かを発見すると大喜びする子だった。両親は娘のことを、「ケルトの先祖返りちゃん」とか「取り替え子ちゃん」とか呼んでいた。幼い頃から話を兄姉に聞かせた。想像力の豊かな妹の話は楽しかったが、そのうちジュリーの話はおもしろおかしいものでなく聞いているうちに不気味で訝しいものに思えて、ひとり去りふたり去りで最後までジュリーの話聞いてくれたすぐ上のピリーも妹のことが心配になってくる。ジュリーの話は想像力豊かな、で片付けられるものではなかった。母さんも理解してくれない。自分を癒してくれるのはバルサムポプラの古木だけ。ほかの人に見えないもののことは話してはいけないんだと思い始めたジュリーはあるとき、母さんと知り合いのゴードリッチおばあちゃんに会いに行って、おばあちゃんが自分と同じように現実の世界の先も見える仲間だと知る。そのおばあちゃんもジュリーの透視?の力で瀕死のところを発見されるがまもなく亡くなってしまふ。いろいろな出来事に直面しながら、予知の力があつたって助けられなければ何にもならない、と苦しむジュリーだったが、そんなとき、父さんが事故に。ジュリーは……………。

昔、魔女と呼ばれた人たちもジュリーのような力を持ったひとだったのでしょか。

日本の『祈祷師の娘』(中脇初枝作 福音館書店)にもこの力に悶え苦しむ少女が出てきます。

これは決して異次元の世界でも奇異な人びとでもありません。私たちのお仲間です。(空・花・颯)

中学生から大人におすすめの本

✿残念ながら沙羅の樹文庫会員に中学生はいないのですが、中学生以上を持つ親御さん(近い将来も含めて)、そして好々爺&婆さんにぜひ彼らはどんな本を読むのか読んでほしいのか知っていただきたいです。きっと読まれたらご自分がのめりこんでしまいますぞ! ✿

今回『金原瑞人[監修]による12歳からの読書案内』(すばる舎刊 日本作品と海外作品)2冊から何冊か(在庫)紹介いたします。この案内書もぜひご一読ください。本の世界を熟知した人たちの書評が各100冊掲載(なお、監修者金原氏は芥川賞『蛇にピアス』金原ひとみさんの父君です)。

★『家守奇譚』(梨木香歩作 新潮社):明治時代の話。亡き友人の家に家守として寄宿した青年が、そこで狸や河童、小鬼や花の精と出会う様子をユーモラスに描いています。続編というか、『村田エフェンディ滞土録』も読まれることをお勧めします。不思議というか切ない世界が展開します。(この2冊は一般書に分類)

★『西の善き魔女 全4巻』(荻原規子作 中央公論新社):シンデレラの道は?日本製ファンタジー。ほかに勾玉3部作がすごいです。

★『つきのふね』(森絵都作 講談社):中学2年の親友同士、あるグループに入って、万引きして一人が捕まって、友情が破綻したあと……、思春期の危うい心象をかがり直すことができるのか。『永遠の出口』『カラフル』など読み応えあります。

★『レモネードを作ろう』(ヴァージニア・Y.ウルフ作 徳間書店)

★『イルカの家』(R.サトクリフ作 評論社)

★『川の上で』(ルマン・シュルツ作 徳間書店)

★『暮を打つ女』(山崎著 早川書房):一般に分類

★『夜行バスにのって』(ウルフ・スタルク作 偕成社)

★『シカゴよりこわい町』(リチャード・ベック作 東京創元社)

★『かあさんのいす』(ベラ・B.ウィリアムズ作絵 あかね書房):これは絵本です。

★『肩甲骨は翼のなごり』(デイヴィッド・アーモンド作 東京創元社) ほかに

(和書より洋書のほうを多く在庫。まだまだあります)

しばらく別置しておきます。